



京都大学 総合人間学部 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

偶然から必然へ.....	田村 類.....	2
いつ止まるんですか.....	宮本 嘉久.....	4

連載企画 「総合人間学とわたし」

映画について——総合人間学的考察.....	木下 千花.....	6
「総合」と「・」(なかぐろ).....	大黒 弘慈.....	8
梁山泊主人の秋.....	田部勢津久.....	10

新任の先生方より

変わっていくことへの抵抗.....	吉江 崇.....	12
-------------------	-----------	----

特集 ご退任を迎えられる先生方から

偶然から必然へ

田村 類 (自然科学系)



長い間お世話になった京都大学に感謝の意を込めて、大学院生として過ごした5年間と21年間の教員としての研究活動を振り返ります。

1977年に、たまたま散歩で訪れた大徳寺の某塔頭に6か月間ほど居候することになりました。日課の苔庭の掃除や朝食・夕食時に、住職や同居していた神学部の学生とインド哲学の院生から宗教と仏教哲学の初歩的な話を聞かせてもらったことが懐かしく思い出されます。これが仏教哲学に触れた最初であり、自分なりに自然科学との接点を考えるきっかけとなりました。当時、つくづく京都は学生にとって、望めば無料で課外講義を受講可能なすばらしい都であると実感しました。しかし、今日ではこの程度のことは、総合人間学部や人間・環境学研究科のカリキュラムの履修で習得できるため、隔世の感があります。また、当時（今もそうですが）、将来、研究者として独り立ちしたければ、大学院修了後に、自分の学生時代の研究とは異なる新しい研究領域を若くして開拓することが必須でした。このため、将来は仏教哲学と化学が結びつくような研究領域を開拓できないものかと漠然と考えたことを覚えています。当時の指導教員は学生にたいして強権を発動することなく、学生を育てる（ほったらかしにしてくれる）最高の環境を提供してくれたように思います。時として、過剰な指導は研究者としての学生の芽を摘むことになるからです。

博士課程修了後（1980年）は、片道切符で米国

の大学へ博士研究員として渡りました。当時、米国内のトップ20に入っていたコロラド州立大学とプリンストン大学の化学科でお世話になりました。しかし、日本の有機合成化学はすでに米国のレベルに達しており、新領域を開拓するためには、さっさと日本に戻った方が得策ではないかと思われました。運よく3年後に日本の大学の助手として就職でき、その後二度大学を移り、1997年に人間・環境学研究科の助教授として採用していただきました。その数年前から有機合成化学から有機結晶化学への専門分野の変更を模索し、その結果、あるキラル有機医薬品化合物が革新的な自然光学分割現象〔優先富化現象（Preferential Enrichment）と命名〕を起こすことを、製薬会社の研究員の友人との共同研究で偶然発見しました。しかし、当初その発現メカニズムは皆目見当が付きませんでした。ある日、時計台地階の生協書籍部で偶然見つけたM. M. Waldrop著『複雑系』を読んで、どうやら非平衡・非線形の複雑系現象が起こったに違いないと目星がつかしました。その後、「結晶化の過程で起こる相転移が引き金となってキラル対称性の破れが発現する複雑系現象」であることを証明することができ、偶然の発見が必然的現象に深化しました。これでやっと、インド哲学と化学の接点を見出すことができたと思っと思っています。インド哲学は宇宙の起源を知ることを目的とした学問であり、空（ゼロ）からインフレーションとビッグバンを経て、「相転移」と「対称性の破れ」の繰り返しによる宇宙創成のメカニズムを説明する、原子論・相対性理論・量子論・複雑系理論の要素をすでに含んでいることが知られてお

り、インド哲学=複雑系理論とも言えるようです。

優先富化現象の発見は、19世紀半ばの Louis Pasteur によるキラル結晶の発見以来の有機結晶化学におけるインパクトのある成果であったため、Pasteur の後継者の Gérard Coquerel 先生一門と Weizmann Institute of Science の Leslie Leiserowitz 先生一門に関心をもってもらい、後日、このお二人の先生が人間・環境学研究科の外国人招聘研究員として来日し、共同研究を開始して、その研究成果を数編の共著論文として発表することができました。

もう一つのテーマである「純有機スピン液晶の合成と磁性」は、外部刺激にたいして感応性を示す液晶を複雑系の散逸構造と捉えて、様々な外部刺激応答性のメタルフリー磁性ソフトマテリアルの開発を目指したものです。分子中央部に有機ラジカル構造を導入したキラルスピン液晶化合物を合成し、これが低磁場中で強い分子間磁気相互作用 ($J > 0$) を発現すること [正の磁気液晶効果 (Positive Magneto-LC Effect) と命名] を学生が発見してくれました。分子磁性の専門家と議論したところ、複雑系であればこのようなことが起こる可能性はあるとのことでした。これまで有機ラジカル結晶の場合には、絶対温度2度 (K) 以下の極低温でのみ分子間強磁性的相互作用 ($J > 0$) が生じる例は知られていましたが、2 K 以上の温度では熱エネルギーのため磁気相互作用のない常磁性 ($J = 0$) として存在するか、あるいはあったとしても反強磁性的相互作用 ($J < 0$) がせいぜいであると考えられていました。この磁性発現のメカニズムは未だ不明のため、この効果は必然的現象に至っておりませんが、これまでの実験結果より、液晶中で動く分子間の協働的集団運動とスピン分極により、スピングラス様の不均一な磁気相互作用を示すユニークな磁気ドメイン構造そしてバンド構造が部分的に形成された可能性が高いと考えています。

正の磁気液晶効果については、特にニトロキシドラジカル化学発祥の地であるロシアの研究者に興味をもってもらい、最近10年間に、モスクワ大

学、カザン大学、ロシア科学アカデミー有機化学研究所の先生方が人間・環境学研究科の外国人招聘研究員として来日し、共同研究を順次開始して、これまでに数編の共著論文を発表することができました。

今後、純有機スピン液晶を含むメタルフリー磁性ソフトマテリアルの研究において卒業生が主導的役割を担い、この研究領域がおおいに発展することを願っています。

最後に、両研究を遂行するにあたり、人間・環境学研究科と総合人間学部の多くの教職員と卒業生、および国内外の共同研究者の皆様にたいへんお世話になりました。心より御礼申し上げます。

(たむら るい)



2012年4月、真如堂での3研究室合同写真



2017年9月、ルーアン大学のCoquerel先生を訪問

特集 ご退任を迎えられる先生方から

いつ止まるんですか

宮本 嘉久 (自然科学系)



講義を初めて担当したのは教養部終わり近くの1990年だった。当時は通年の講義が多く、4月にはあふれかえっていた講義室もゴールデンウィークが過ぎると半分ほどに

なり、11月祭の頃になると、1時間目の講義では出席は3人ということもあった。3人になると学生同士で意識するのか、やる気に満ちていた学生が残ったのかそれ以上は減らなかった。

初年度は誰も講義の準備が大変なのだが、年間25回の連続公演のつもりで、関西人の生き甲斐である笑いをとるためのネタ作りに倍の時間をかけた。ギャグやだじゃれはいいのだけれど、1年経つとボケが通用していないことに気がついた。「大」の字の左上に点をつけると猫、のようなことをいうと、レポートや試験にそのような解答が現れてしまう。物理の講義では学生は普段とは違う緊張状態にあるんだと思い、もう1年がんばって工夫してみたけど進歩がなかった。一人でうまいツッコミを入れる方法が見つからず、能力のなさを悟って、関西人の一番のよろこびは諦めることにした。

講義をしてすぐ分かることは、担当科目の内容を自分がそれまで全然理解できていないということだった。物理のいろんな分野を勉強し直すには講義を担当するに限ると思い、全科目の担当を計

画した。定年までの年数を当時の提供科目の数で割ると、ほぼ4年ごとに新しい科目を担当すればよいという計算になった。教養部が廃止されて全学共通科目ができた機会や、その後の改変のときに新しい科目担当を希望し、教務担当になってからは退職される先生が担当されていた科目を引き継ぐことにして20年近くは計画が進んでいたのだけれど、その後は機会を逸して全科目担当の目論見も挫折してしまった。

学生のときは、たまに出席する物理や数学の講義では頭を空っぽにしてただただ板書を写し、試験前にノートや参考書を見て、やはりわからんと確認して試験を受けるとなぜか単位はもらえるということを繰り返していたし、一部の学生を除いてはそんなもんだらうと思っていた。ところが講義をすると、履修だけでなく講義内容についても質問が出るし、つい今しゃべった内容を話題にしながら、講義室を出ていく学生を見たときにはびっくりすると同時にとても感激した。印象に残っている質問の1つを紹介したい。

二十世紀の終わり頃、「振動・波動論」という主に2回生向けの講義で減衰振動について解説したときのことだった。例えば、振り子を振らせるとその振幅がだんだん小さくなっていく。減衰振動というのは、振幅の減衰の様子を記述するモデルのことで、単純な場合には振幅は一定の割合で小さくなる。つまり、指数関数的に0に近づいていく。講義後、工学部の学生さんがやってきて、

「要するに、いつ止まるんですか？」と聞いてきた。予想外の質問にうろたえながら、そのときは「止まった、という状態をどう定義するかに依るでしょう。」と答えた。

だいぶ日数が経ってから、この質問が引っかかっていたのか、思い出したので考え直してみた。腕の長さ50cmの先に直径5cmのおもりがついている振り子時計を想定しよう。ゼンマイ仕掛けがないと振り子はやがて止まってしまう。振り子が止まる主な原因は支点の摩擦で、動摩擦と静止摩擦を考えて、簡単ではないけれど、止まる時刻を計算することができる。摩擦を小さくするような工夫をどんどん取り入れて、止まりかけた状態から止まったという状態への変化を考える。摩擦がゼロの極限が可能だとしても、空気抵抗があるから振り子を真空容器の中に入れて止まるまでの時間はずっと長くなる。次に振り子が「止まった」状態を考えてみよう。振り子はふつう室温にあるので、振り子を構成する原子は熱運動をしており、厳密な意味では止まっていない。ならば、少しずつ冷やして絶対零度に近づける。絶対零度に限りなく近づけたとしてもまだ量子ゆらぎがある。量子ゆらぎとは、粒子の位置と速度（正確には運動量）を同時に確定できないという不確定性原理に基づく現象をいう。長さ50cmの振り子には必ず摩擦があるし、熱ゆらぎ（熱運動）も量子ゆらぎもほとんど関係ないのだけれど、天体や微視的な物体の振動を考える場合もある。これらのことを考慮して「止まった」状態というのをどう考えればいいのか、と質問に答えるだけの力がなかったと悔やまれる。熱ゆらぎや量子ゆらぎについての考察は現代物理学の課題の1つであり、素朴な質問は重要な問題に触れる可能性をもっていたと思う。

講義を始めた頃は、その分野での知識や考え方をそれらに至った経緯とは関係なく、現時点から振り返ってできるだけ分かり易い論理で伝えるよ

うに講義の準備をしていた。しかし、学生さんの質問にある疑問や戸惑いを聞いていると、また自分の経験からも、初学者にとっては整然とした論理による説明より、回り道の様であっても先達が辿った思考に沿った解説の方が理解しやすい項目、概念が多いことに気がつき、講義ノートや講義内容がこの方向で変わってきた。講義というのは、その分野に学問的に日々接触している者が、いろいろな分野や学生から刺激を受けて少しずつ変わりつつ、その時に到達している視点から人間の思考の歴史の縮刷版を演じることのような気がする。

これまで何とか講義を続けることができたのは協同作業に参加してくれた学生や、講義を支えてくれた教員、職員の皆さんのお蔭です。長い間、本当にありがとうございました。

(みやもと よしひさ)



2018年1月9日

連載企画 「総合人間学とわたし」

映画について——総合人間学的考察

木下 千花 (人間科学系)



映画学(時間割では「動態映画文化論」と呼ばれている)は高校には存在しない科目なので、しばしば説明の必要が出てくる。というよりも、「きっとみなさんいぶかしく

思っているだろうな」と先回りして説明してしまうことが多い。(一方、高校のころから京大の総人で映画が勉強できることは知っていました、という学生さんもいる。)そんなときの定型的説明文は以下のようなものだ。「文学史や美術史のようなことを、対象を映画にして行うのが映画史です。また、現代文では言葉による表現について学びますね。例えば比喩とか。そうしたことを映画について研究しています」。しかし、便利なのでとりあえずここから始めることにしているとはいえ、この説明は私がやっている人文学的な映画研究についてはうまく当て嵌まるとしても、「映画」というメディア(媒体)とそれに対する様々なアプローチに照らすとあまりに狭い。本稿では、私にとって身近な対象である「映画」について総合人間学的に考えることで、逆に「総合人間学」とは何かを思考する糸口にしようと思う。

映画、つまり動く映像の記録装置と再現装置が発明されたのは、1895年のことだ。しかし、映画が誕生した当時、文学や美術のように映画を研究対象とする学問が現れるなどと予想した者はほと

んどいなかったはずだ。映画は「芸術」とは考えられていなかったからである。映画の原理はいわゆる「パラパラマンガ」と同じである。運動する物体を連続写真に撮り、それを断続的に遮りながら続けて映写すると、「仮現運動」「臨界ちらつき融合」と呼ばれる目の錯覚が生じ、像が動いているように見えるわけだ。「パラパラマンガ」の原理を利用したソーマトロープのような玩具はヨーロッパでも19世紀前半には知られていたが、映画の発明に直接つながったのは、フランスの生理学者エチエンヌ＝ジュール・マレーとアメリカの写真家エドワード・マイブリッジがほぼ同じ時期に開発した連続写真の撮影法である。しかし、マレーの目的は人間や動物の運動の仕組みを分析することであり、それを再構成する映画の作成には全く興味がなかった。富豪のリーランド・スタンフォード(スタンフォード大学の創立者でもある)がマイブリッジの研究に出資したのは、「走る馬の4本の脚がすべて宙に浮く瞬間はあるのか」という肉眼では答えられない疑問を解くためである。つまり、当然ながら、映画の発明の基盤をなしたのは理系的な関心であり、現在の学問としては認知科学や生理学の領域である。

その後、発明王トマス・エディソンが参入して1890年代前半には覗き見式の動画再生装置キネトスコープを実用化した。それにも拘わらず「映画」の発明の日付が一般に1895年12月28日とされるのは、この日、フランスで写真の感光剤を製

造していた実業家リュミエール兄弟が自ら発明したシネマトグラフを公衆の前で上映したからである。しかし、映画には戦争や政治家の演説、諸々の事象の記録・伝達媒体として大きな期待がかけられたが、一時のブームが去ってからもなおビジネスとして成立するかどうかは不透明だった。現にリュミエール兄弟はまもなく映画産業から離脱している。映画は幻燈（スライド）や漫画の影響を受けつつ文学や演劇の要素を取り入れ、1910年代半ばには1時間半から2時間ほどの物語を語る現在の「映画」の枠組みが整えられた。

その後、「映画」の主流はハリウッドや日本において商業ベースで作られるこうした物語映画となり、英語圏では1970年代、それらのテーマ、物語構造、登場人物の造型、表現技法などを描写・分析する人文学的な映画学が文学理論やいわゆる現代思想と密接に連携しながら興隆した。1990年代以降、日本においてその中心の一つとなったのはまさに総合人間学部と人間・環境学研究科であり、私が主に取り組むのもそのような研究である。

しかし、映画は世界そのものと同じぐらい多様である。マレーやマイブリッジ、さらにはエディソン（もしくはその助手で実質的な発明者と言われるウィリアム・K・L・ディクソン）やリュミエール兄弟が映像として切り取った人間や事物とその環境との関係は、狭義の人文学的な問題意識のみならず、心理学、歴史学、社会学、人類学、さらには諸々の自然科学の関心にも開かれているだろう。このように映画がその誕生の以前から内包していた複数的な可能性は、近年のテクノロジーの発展、とりわけデジタル化によってより活性化したと思われる。かつて映像は、その目的が外科手術の記録であろうと、ハエの動きの分析であろうと、外国人の習俗の収集であろうと、訓練を積んだプロが入念な準備を重ね、重い機材を操り、照明を熟慮して得られるものだった。ところが、ス

マホでならば幼児でも映像を撮ることができ、小学生でもyoutubeなどを使ってそれを配信することができる。かくして、無演出の映像を、作り込むこともなく、いくらでもダダ漏れさせることもできるようになった。「映画」は、再び諸々の映像のうちの一つの種類に過ぎなくなり、映像を通じた人間と社会や自然との関わり方、ようするに映像の使い途は日ごとに拡大している。

このような映像メディア環境の変化には、映画研究にとって幾つかの目覚ましい帰結をもたらした。第一に、人文学的な映画研究の関心は、上述の狭義の「映画」が確立する以前の「初期映画」や、科学映画や教育映画、PR映画、さらにはホームムービーへと拡大している。第二に、かつては不純だと考えられていた他領域の映画へのアプローチを積極的に取り入れるようになった。最も顕著な例が認知科学だろう。私の大学院時代には、アイトラッキングによって映画の演出や編集を説明しようとするれば、人種やジェンダーをはじめとした社会的・文化的な要因を無視する反動的な馬鹿と思われかねなかったのだから、隔世の感がある。さらに人文学のなかでも演劇や絵画、漫画、アニメーションと映画とのメディアミックス的な関係が積極的に語られるようになり、純粋な「映画性」が称揚されることは希になった。このような映画研究の動向をまとめて「総合人間学化」と呼ぶことができるかもしれない。

とはいえ、総合人間学的な知のありかた——人間、事物、現象と社会や環境との関係を領域横断的に捉える好奇心と教養を培うこと——にとって、映画だけが特権的な対象であるわけではない。みなさんが現在いちばん興味を持っている対象が何であれ、総合人間学部という場で存分に探求して欲しい。

（きのした ちか）

連載企画 「総合人間学とわたし」

「総合」と「・」(なかぐる)

大黒 弘慈 (国際文明学系)



総合人間学部では毎年10月ごろに1年生を対象にガイダンスが開かれる。5つの学系に分かれて各分野の紹介と就職・進学相談を行なうことを趣旨としたもので、その際、学生諸君に指導教員とアドバイザーを決めてもらう参考になればと、参加教員がひとりひとり自己紹介をしていくのだが、私はこれが苦手である。大勢の前でしゃべることが不得手なせいもあるが、それだけではない。もともと学生向けの自己紹介のはずなのだが、このガイダンスは同時に教員向けの自己紹介の機会でもある。そもそも分野を異にする教員どうしが一堂に会して自身の専門を語る機会に乏しいため、教員の側もまた新1年生と同様に、あの先生は日頃どんなことに興味を持っているのだろうか、この機を逃すまいと考えて、ガイダンスに出席するのである。そう思っているのは私だけかもしれないが、しかし私自身は他の先生方の話に興味を示すだけの余裕がない。下手なことは言えないということばかりに囚われ、新人教員でもないのにただもう舞い上がってしまうのである。

しかし「苦手」を自覚するようになったのは、それだけが理由ではないような気がする。私の出自は経済学だが、多くの分野が同居する総合人間学部では自己紹介もまた、自己の出自をあらためて強く意識せざるを得ないものとなる。頼まれたわけでもないのに、経済学を代表し経済学を背負わされたような気になるのだ。それだけでなく、経済や経済学の最先端にも触れた方がいいのだろうかあと(さしずめ今ならノーベル賞を取った行動

経済学、アベノミクスの行方、一带一路の可能性あたりがアップトゥデートということになるのだろうか)、妙に気負ってしまう。しかし私はといえ、経済学にあまり興味がなく、最新の経済の動向にも疎い。むしろ経済学(というか主流派経済学)に対するどうしようもない違和感が研究を志したそもそものきっかけだといってよい。

私がかねてより、経済学の主流が素通りするテーマの方にむしろ興味があるのだが、しかしこちらはさらに伝わりにくい。経済学(というか主流派経済学)の説明能力の喪失とともに経済学はいま人気がないと聞かすが、その経済学にすら見向きもされないテーマに誰が関心を抱くというのか。(私が学生の頃、東京大学駒場の教養学部は本郷の専門学部を意識しすぎるあまり、本郷以上に専門特化した研究にのめりこんでいると指摘されたことがあるが、私が心ならずも経済学部に進学したのはそうした事情がある)。というわけで、くだんの自己紹介において私は、経済学を代表することもできず、また極私的なテーマに開き直すこともできず、ほそほそと口ごもりながら毎度お茶を濁すことになる。

しかし、後味の悪さとともにいつも逃げるように教室をあとにしなが、なぜ私は性懲りもなく次の年にはまたガイダンスへと重い足を運ぶのか。そんなに苦痛であれば欠席すればよいのと思いつつ、あえてこの苦行を自らに課しているのにはわけがある。もちろんこんな拙い私の話にも興味を持ってくれる物好きな学生が紛れ込んでいるかともいう淡い期待がないわけではない。しかしこちらの効果はあまりないことが過去の実績が証明済みである。私が一抹の期待をかけているのは実は単純なことで、他者に開かれた場を確認

しに行く、ということである。

総合人間学部や教養学部が誇りうる特性として「超学性」や「学際性」が指摘されることがあるが、ここで「他者に開かれた場」というのはこれらとも少し違う。諸学を統一するような超越的な視点などそもそも望むべくもない。また私たちはそれぞれの分野を極めたあとで他分野と接触するわけではない。その意味で、「総合」の文字はつねに私にとって少し気恥ずかしく、また荷が重い。

私自身はと言えば、哲学や社会学や人類学など隣接する諸分野に興味を覚えるとはいえ、それはあくまで経済学が前提にしている公理に懐疑的だからである。諸学の知見が経済学の前提に反省を迫るのである。この意味で私は、「総合人間学部」の「総合」よりは、「人間・環境学研究科」の「・」（なかぐろ）にみずからの研究姿勢を重ねあわせ、ここにいてもいいのかもしれないという自己確証を、かろうじてこの「・」から引き出してきたように思う。どういうことか。

「人間・環境学研究科」という名称には、人文科学を意味する「人間」と自然科学を意味する「環境」の文字はあるが、社会科学に相当する文字は見当たらない。あるとしたらそれが「・」である。社会科学ことに経済学は、人環では吹けば飛ぶような鼻糞のような存在だという意味が「・」には込められているのですよねと同意を求めてきた学生がいたが、もちろんそんな自虐趣味は私にはない。「・」は人文科学と自然科学を「繋ぐ」という意味にも解釈できるが、繋ぐのならむしろ「-」（ハイフン）が妥当であろう。「・」はむしろ「切断」を仄めかす。しかしそれは単なる切断というでもない。経済学の主流がなぜか脇に追いやるテーマの一つに貨幣があるが、貨幣はどこかしらこの「・」を想起させるところがある。

たとえばマルクスは『経済学・哲学草稿』という初期の著作で（それは人間学的マルクス主義の代表作でもあるのだが）、次のように述べている。

「貨幣が、私を人間的な生活に、社会を私に、私を自然と人間とに結びつける紐帯であるとすれば、貨幣は一切の紐帯の紐帯ではないか！それは一切の紐帯を解きはなしたり結びつけたりで

きるのではないか！だからそれはまた、一般的な縁切りの手段ではないか！それは社会の真の結合手段、電気化学的な力であるのと同様に、真の分離貨幣でもある」（強調マルクス）。

たしかに貨幣は、あらゆるものが買えるという意味でそれがなければまともな社会生活は送れないが、他方で億万長者を夢想する守銭奴が社会と縁を切ってひたすら蓄財に励む手段ともなりうる。貨幣はかように「繋ぎつつ切断する」両義性をもつが、また投機を使喚するためつねに敵対視される運命にある。しかし貨幣に無限の価値増殖を強いるのは、むしろ商品世界であり、資本という化け物である。マルクスが『資本論』で解き明かしたのはそういうことである。

貨幣を仲立ちとする交換の対極が「贈与」であるが、贈与はうまく機能すると、より多くの返礼を強いる義務感から受贈者を解放し共同体的規範から一時的に自由にしてくれると同時に、受贈者がふたたび社会に回帰し人とつながる可能性をもたらす。この場合は、貨幣とは逆に「切断しつつ繋がる」のである。したがって私が「・」に読み込んでいるのは、正確には貨幣の両義性ではなく贈与の両義性というべきかもしれない。

否応なく異分野の人と接触せざるを得ない総人、人環にいると、どうせ通じまいと確信のないまま独りごちた一言が、思ってもみないときに思ってもみないところで思ってもみない分野の人から、それこういうことですよねと同感してもらえる機会が、まれにではあるがたしかにある。「切断しつつ繋がる」というこの感覚、ありていに言えば「似ている」というこの感覚は（それはまた貨幣によって駆り立てられる「競争」ではなく、他者に開かれた場が約束する「共生」とも一脈通じていると思うが）、他学部、他研究科では恐らく味わえないものだと思う。

「・」は学部名の要素としてはなるほど収まりが悪いし、通常発音もされず略称表記においてはたやすく切り捨てられてしまう。しかし「人間・環境学研究科」の「かなめ」だと私はひそかに思っている。「総合」もこの意味において理解したい。
(だいこく こうじ)

連載企画 「総合人間学とわたし」

梁山泊主人の秋

田部 勢津久 (自然科学系)



それは百万遍の懐石料亭の話ではない。中国山東省でも左京区吉田泉殿町でもなく吉田二本松町であった最近の話である。

2017年9月30日土曜
昼：主人は人環客員教授

として着任する Tartu 大学 MB 教授を迎え、平日予め不動産屋から預かった鍵を渡すために Y 関空シャトルの目的地である百万遍の契約マンション前で待ち合わせる。国際的な固体物理学者で長年京都の大ファンである彼にとり今回の4ヶ月滞在が大変嬉しく、また蛍光体電子状態計算で共同研究を待ち望んだ材料化学者である主人 (=筆者) も大歓迎である。入室後部屋常設の電化製品その他の使用法、隣接する某コンビニで100円カフェの注文法を教える。既に京都の地理に詳しいため、全く世話が掛からない彼は、翌月曜から毎週のゼミと雑誌会(院生輪番発表)での議論と講義に加え、ほぼ毎日、朝昼とオフィスでコーヒーを飲みながら(時には院生も交え)議論、本稿執筆の12月現在、既に3種ほど共著論文の構想ができつつある。

10月10日火曜：新たな博士研究員(PD)として北京地質大学からHJ博士が来日合流、早速人事掛に同行し採用の手続きを。幸い区役所での外国人登録と銀行口座開設等の手続きは大学の国際交流サービスオフィスが代行同行してくれるようになったので、数年前よりホスト教員の受入れ準備は楽である。

10月16日月曜：学術振興会(JSPS)と仏国立科学研究センター(CNRS)支援の日仏二国間共同

研究のため、パリ PSL 大学博士院生の VC 君が来京合流した。一月余の研究滞在のため事前予約したウィークリマンションの最終契約と鍵受領をしに不動産屋に同行、初の日本生活なので近所の地理や買い物法の概要を教える。彼の指導教員である BV 氏(CNRS 一級ディレクタ)とは同世代で研究分野が近く、ここ6年程毎年国際会議で飲み食い議論する仲。2014年秋には3ヶ月間、人環客員教授として当梁山泊に滞在、光を蓄える蛍光体材料につき密に共同研究を行った。この縁で BV 氏帰国後翌年、当時人環学位取得後学振 PD をしていた YK さん(東大助教、総人卒)と修士院生の MK 君(味の素)は数ヶ月ずつ、KA 君(現 D2)は一ヶ月間、パリ CNRS 化学研究所に滞在して共同研究することになる。

4日後の10月20日金曜：BV 本人が到着、3週間滞在のため不動産屋へ同行契約後、マンションへ案内。部屋を気に入った彼は同日夕刻フランス土産のワイン3本とフォアグラパテ etc、プラス清風荘近所のお気に入りのパン屋でバゲットを買い込み、既に勝手知ったる我がオフィスでガラス食器類を並べ、包丁駆使、早々に夕刻から研究室の学生ら交えて呑み会を始める。彼には時差ボケという概念がなく、毎度その体力に驚かされる。互いに各種会議招待常連である MB 教授とは旧知の仲なので紹介は不要。大いに呑み少し盛り上り過ぎた。翌土曜日、筆者は院試説明会のため東京日帰り出張、翌日曜は友人の属する某オケ演奏会が北山のコンサートホールであり、家内を含め5人で現地集合。会場で名誉教授 TH 先生(分析化学)と会う。演奏会后、北大路で夕食会、我が娘二人も合流。日本酒4種×2合、ワイン1本を空けた。ちなみに我が家の3女子は揃って下戸であり、男

子4人（仏2、露1、邦人1名）の所業である。

11月7日火曜午前：Elsevier出版のM氏が蘭 Amsterdam から来訪。同出版が発刊する多くの国際論文誌で Editor を務める京大在籍の複数教員の意見聴取が目的で、筆者も現在 Journal of Luminescence 誌の Associate Editor の任にある。奇しくも MB 教授は同出版 Optical Materials 誌の編集長なので丁度よい機会と同席してもらい、今後の論文誌出版方式や出版社の生き残り策について意見交換する。その後、研究室の皆と吉田生協で昼食を共に。北朝鮮情勢や先月の総選挙での与党圧勝等が話題に。担当する他分野ジャーナル関係者訪問のため、吉田本部地区歴訪を終えた彼は桂キャンパスへと向かった。

研究室は4名の新外国人が加わり毎週のゼミと雑誌会の英語化が徹底されたところに...

11月12日日曜：また別テーマの共同研究打合せのためポーランドの MG 教授が4回目の来京。13日月曜晩は、構成員、既滞在6外国人はもちろん一時来京中の MB 夫人とうちの家族らも合流し、百万遍でなんとか十数名のテーブルを確保、みなで夕食歓迎会。翌朝は圧力下の固体電子構造変化について講義をして頂く。英語に慣れてきた M1 院生からも質問が出るようになり、少し嬉しい。既に共著論文もある MG 教授は、JU 助教が院生時代にうちで始めた光伝導度測定による蛍光体電子構造評価に興味をもち、高圧光物性に展開する研究申請で EU の大きなグラントを採ったそう。3泊滞在だが、11月シーズンなかなか手頃なホテルが取れなかったので AirB&B で探し見繕った堀川今出川の宿がお気に入りだったとのこと。よかった。最終日は楽友会館へ、京大地ビールホワイトナイルの来歴を紹介、試飲？する。

11月13日月曜：JSPS 外国人特別研究員に採択された MBa 君が夫妻で来日合流、2年間の任期でビスマス材料に関する共同研究開始。一昨年 Venezia 大（伊）博士在学中に6ヶ月間うちで滞在研究し、優れた成果を挙げた彼も勝手知ったる親日家である。そのくせ全く日本語を覚えようとしない。が、うちの日本人学生の会話力向上のためにはそれもまたよし。今年彼だけが運良く国際交流会館夫婦室（修学院）があたり、お得な家賃で新婚生活スタート。他の方々はクジ運が悪かつ

た。律儀な彼は夫婦室入居のため？もあり来日直前に交際中の彼女と入籍した。実は過去の入居採択客員夫妻のうち2組は正式に入籍していないし必要条件でもない。が、そのことは黙っていた。

現在学振 PD である JX 君（2017年博士修了）や D2 の KA 君の協力で VC 君の測定実験も順調に進展。一度試料合成のため高価な白金坩堝（融点 1700℃ 以上）を溶かしてしまったのにはガックリ来たが。地金が高いので改鑄修理に出す。彼ら二人の英語は完璧で会話意思疎通に全く不自由はない。

11月17日金曜：M2 の MH 君の手配で、VC 君の送別会を今出川通沿いのモツ鍋屋で開く。なかなか泣かせる惜別スピーチをしてくれた。ここ古びた京町家をそのまま使った造りが欧州人好みらしく、鍋の味共々 MB 夫妻（露）、MBa 夫妻（伊）にも好評であった。

11月25日土曜：M1 の YK 君らの企画で嵐山から清滝へハイキング。JU 助教の長男 H 君7歳も同行、毎度みなのアイドルである。紅葉満喫後、帰りは保津峡トロッコ列車で。

11月29日水曜：第7回希土類発光材料国際会議参加のため、JU 助教、JX 君、KA 君、研究室 OB の TN 君（北大助教）らとローマで合流。会場はコロッセオ近くのローマ大学 Sapienza 校。みな口頭発表で採択、それぞれ健闘上出来。今回筆者は初日60分の基調講演。講演後多くの質問を頂き、また主催者の Righini 博士や Dorenbos 教授、Bettinelli 教授ら多くの同僚達からも好評頂いた。会議後 KA 君はパリの BV の所へ実験に。

以上は今秋筆者の経験した事項のほんの断片である。今年を振り返れば、米 CA 州、中国福建省、ハワイ島、Gdansk、ギリシャクレタ島、蘭州、ブラジル、と海外招待は8回。来年前半も現時点で、北京、米 TX 州、カナダ Quebec、ポーランドでの各種国際会議での基調講演や特別講演招待が決まっている。

ところで、文理両道を目指す総人生諸君。もう少し自然科学系主専攻学生割合が増えれば、全体の国際経験がもっと進むのになあ...、と思うのは筆者だけであろうか？

（たなべ せつひさ）

新任の先生方より

変わっていくことへの抵抗

吉江 崇 (国際文明学系)



仮に「自分史年表」を作るとすれば、私の場合、5年間隔の線をあらかじめ引いておくのが便利なようです。1997年に京都大学大学院文学研究科に入学、修士・博士課程を終えて2002年に埋蔵文化財研究センター(現・

文化財総合研究センター)に就職、2007年から10年間、京都教育大学で勤務し、2017年10月に総合人間学部、人間・環境学研究科へ移ってきました。5年ないしはその倍数の間隔で変化があるようで、そう思うと、5年、10年、20年後には何かが起こるにちがいない、といった預言者めいた感覚を抱いてしまいます。

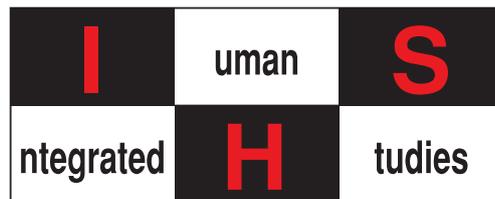
私の専門は奈良時代や平安時代を扱う日本古代史という分野です。天皇や貴族などで構成される宮廷社会の様子を、折々になされた儀礼を素材に検討しています。律令国家が解体していく平安時代においては、事細かな故実・先例を遵守することが、宮廷社会の重要な事柄でした。貴族たちは故実・先例に精通することが求められ、その知識の量が出世や信頼の鍵となります。もし、故実・先例を知らずに儀式に臨むと、周囲から笑われて「至愚のまた至愚なり」といった痛烈な批判を浴びせられるのですから、彼らにとっては切実です。そのため彼らは故実・先例の収集・蓄積に躍起となります。自らや子孫たちの参考に供すべく日々のできごとを可能な限り詳細に記し、親しい人からさまざまな記録を借りてせっせとそれを写し、時にはそれらを切り貼りして自分だけの「虎の巻」を作ります。平安時代の豪奢とも言える宮廷文化は、このような貴族たちの熱意によって成り立っていたと言えるのです。こうして運営された各種の儀礼を分析し、宮廷社会が立脚するところの規範意識や人々の関係性を読み取ることが私の主要

な研究テーマです。

故実・先例に対して執拗なこだわりを示す一方、彼らは時間の変化についても神経質でした。よく知られている例ですと、釈迦の入滅を起点として、仏教は500年ないし1000年の間隔で衰退していくと考えられ、正法・像法を経て1052年から末法の世に入るとされたことは、当時の社会をこの上ない不安に陥れることになりました。また、901年、文章博士であった三善清行は、未来の吉凶を占う識緯説に基づいて1320年間を1蕨というまとまりで捉え、紀元前660年とされた神武天皇の即位年から1320年後にあたる661年を第2蕨の初め、そこから240年(60年×4)後の901年を革命の年と算出し、元号を改めるよう求める書物を著して天皇へ提出しました。天皇が100代で尽きるだろうといった百王思想も、人々の危機意識を増大させます。これらに通底するのは、絶え間ない社会の変化を数値でもって根拠付け、変化を客観的かつ明確に認識することによって、それを乗り越えるための方策を何とかして考案しようとする態度です。変わらざるを得ない社会を前にして、何とかして昔のままの秩序を維持したい、そういった変化に対する抵抗が、上に記したような故実・先例の重視につながったのかもしれませんが。

さて、5年ないしその倍数で私に変化が訪れるとしますと、5年、10年、20年後の「自分史年表」には何が記されるのでしょうか。体力の衰えや記憶力・集中力の減退といった自分自身の問題、自分を取り巻く社会環境の変化に思いをはせると、どうも楽観視できるような内容ではなさそうな予感がします。変化に不安を感じた平安時代の貴族たちがそうしたように、大学生や大学院生だった10代後半から20代のころの姿を思い起こし、必死になってそれにしがみつकिながら、みなさんとともに学んでいきたいと考えています。

(よしえ たかし)



編集後記

◆『総合人間学部広報』第60号をお届けいたします。春は出会いと別れの交錯する節目のシーズン、とは使い古された言い回しですが、今号ではこの3月末日をもって退職されるお二方の先生、そして昨年秋に着任されたばかりの新任の先生お一人からご挨拶を頂戴しました。特に退職されるお二人の先生はいずれも研究科・学部執行部の重責を担ってこられ、下っ端の私からは遥か遠くの頂きを仰ぎ見るような存在でしたが、お原稿を拝読してその研究者や教員としての素顔を垣間見た気がいたします。今後も末永く、我々を温かく見守っていて下さい。また連載企画「総合人間学とわたし」には三名の先生方からご寄稿いただきましたが、それぞれに興味深い「総合人間学」観を展開され、大いに啓発されました。さて、60号を重ねてきた本誌は、学部・大学院が一体化した部局の広報誌としての性格をはっきりさせるため、次号より『総人・人環広報』に改名して新たなスタートを切ることになりました。そうした「節目」に編集委員長として立ち会うことができたのは少し自慢です。新“広報”に大いにご期待ください。

(K・I)



2011年10月
総人・人環親睦 大文字山登山

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会